

## FLEET NEWS DOMESTIC

# 最新鋭イージス艦の蹉跌 考察「あたご」衝突事故の深層

文／平間洋一（元海将補）  
写真／第三管区海上保安本部

去る2月、当時海自最新のイージス艦「あたご」が漁船と衝突事故を起こした。国民を守るはずの「無敵の盾」は、なぜ事故を回避できなかったのか。事故後に表れてきた問題点を分析する。

## なぜ事故は起きたか

去る2月19日未明、最新鋭のイージス護衛艦「あたご」が、房総半島野島崎の南南西約42kmの海上でマグロ延縄漁船「清徳丸」と衝突した。新聞報道などによると、当時「あたご」は10ノット（時速18.5km）で北北西に、「清徳丸」は14ノット（時速26km）で南南西に進んでいたという。

まず事故の状況を振り返ってみよう。「あたご」では午前4時前に当直員が交代している。交代後の右見張員は、衝突12分前の3時55分に「清徳丸」と思われる左舷赤灯を視認した。

海上衝突予防法によれば相手船を右側（赤灯）を見る「あたご」に避ける義務がある。しかし、同じ見張りが衝突の2分前の4時5分に、今度は「右前方に青灯」と報告。青灯が見えたというのは「清徳丸」が「あたご」から離れて行くことを意味し、衝突の恐れはないのだが、これは別の漁船の灯火だったのかもしれない。

「あたご」の当直士官は4時6分に衝突の危険を感じて自動操舵から手動操舵に切り替え、後進一杯で回避しようとした。が、間に合わず、艦首から清徳丸の左舷に衝突したというのが新聞などの報じた事故の概要である。

「あたご」が、なぜ信号灯などを照射したり、汽笛をならして注意喚起をしなかったのか、なぜ、後進一杯だけで転舵して回避しなかったのかなど疑問点はいくらかも浮かぶ。衝突寸前まで当直士官を筆頭に見張りやレーダーを担当する当直員の多くが、航行の危険をほとんど感じることなく、漫然と航海していたのではないのか、と思わざるを得ない状況である。

ハワイでのミサイルシステム認定試験を完了



2月19日、現場海域で海上保安庁が撮影した「あたご」。画面奥に捜索に当たる巡視艇、護衛艦の姿も見える

し、4ヵ月ぶりに母港を前にした気のゆるみ、当直交代前後の混乱、交代直後で暗夜に目が慣れる暗順応時間の不足、夜から夜明けを迎え、緊張感がゆるむ「魔の時刻帯」であった不運など、私にはヒューマンエラーの連鎖があったように思われる。

しかし、漁船側にも問題はなかったか。ブリッジに立ち、前を向いて操船していたならば、月明かりもあり、漁船からは1万トンもある大型船は山のように見えたと思われる。他の漁船がすべて回避したのに、なぜ「清徳丸」だけが回避行動を取らなかったのか——。また、他の漁船が無線で連絡を取り合っていたのに、「清徳丸」だけが応じなかったのかという疑問は残る。

私も護衛艦「ちとせ」艦長のときに停泊中の貨物船に衝突し戒告処分を受けたことがある。しかし、停泊中の衝突（正確には直前で舵を切ったので接触事故）であったが、貨物船側にも2割の非が認められた。それほど海難事故は双方に非があるものなのである。

## 通用しない海軍の「常識」

今回、マスコミは「あたご」に全面的な過失と気のゆるみがあったと報じ、見張員が「避けてくれると思った」と発言すると、「横柄草大な思い上がり」と非難した。しかし、この見張員の発言は日本では通じないが、世界ではある意味「常識」なのである。

英国には「平和なときには神に祈り、戦争のときには海軍に祈る」という諺があるように、外国では軍艦は国を守るものとして国民から敬意を表されている。そのため日本の護衛艦も国外では「軍艦」として国家主権の延長とされるのだ。大使館と同様に尊敬と礼遇を受け、治外法権と不可侵権を認められ、公海上では海賊などを逮捕する警察権まで認められている。

このため、民間船は海上の安全を守ってくれる軍艦に進路を譲り、船尾の国旗を半分下ろして元の位置に戻し、敬礼をするのが慣例である。民間船のこの敬礼を見逃すことは非礼であるだけでなく、規律と士気を示してしまふ。そこで見張員は商船に遭遇すると船尾の旗竿の国旗の降下を見逃さないように厳しく教育されてきたものだ。こうした「常識」が「避けてくれると思った」との発言になったのかもしれない。

## 海自が縛られる半世紀前の条文

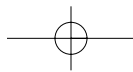
今回の事故で次に非難されたのが報告の遅れである。ではなぜ、遅れたのであろうか。この報告を受けた防衛省内局の部員（背広組）が大臣に報告したのは、事故発生から1時間半も後と報じられている。ところが、緊急事態でも制服組からは直接大臣に報告できない。この防

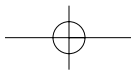


「あたご」の艦首には、漁船のものと思われる塗料が付着していた



現場海域の「あたご」。作業艇を吊るすアームが展開されており、自らも行方不明者の捜索に当たっていたことが分かるだろう





衛省の体制が、対処の遅れとなり、隠蔽体質と非難されたのだ。

また、前言を覆す不完全、不適切な対応にも事情がある。というのは、「あたご」が海上事故の「証拠物件」として乗員もろとも海上保安庁に抑えられてしまったからだ。「あたご」は外部との連絡を禁止され、海上保安庁からは衝突事故の核心部分に触れることは公表を控えるようにと釘をさされていた。その上、国交大臣からも「海自にも内部調査権があるにしても、私の方の了解を得てからやるのが筋だ」と防衛省側の発言にブレーキがかけられていた。

このため国防相や海幕長は的確な答弁ができず、説明が二転三転すると、マスコミは自衛隊を隠蔽体質と責め立てた。野党もまた、「海上保安庁が調査しており、現段階で答えられる知識を持っていない」という国防相の答弁に対し、無責任、無能大臣と罷免要求を口にするなど政権攻撃の具として利用した感否めない。

では、なぜこんな後手後手の対応になってしまったのだろうか。その理由を政治家も記者も、学者も国民も知らない。歴史をたどると、海上自衛隊の前身の警備隊は「海上保安庁法の一部を改訂する法律」により、昭和27(1952)年4月に誕生し、3ヵ月後の8月1日に警備隊と呼称を変えて保安庁に移籍された。当時は「海上に於ける人命若しくは財産の保護、または治安の維持」などを目的とする警察的性格の部隊であったが、昭和28(1953)年に保安庁と海上保安庁が合意した「犯罪調査に関する協定」で、「海上における犯罪の調査は原則として海上保安庁が行う」とされたのだ。この半世紀前の条文が自衛隊の発言を押さえたのである。

### 事故で失ったもの

事故後、防衛大臣と海上自衛隊の最高指揮官・海上幕僚長は深々と頭を下げ、その後責任を取って辞職した。

激しいバッシングは、自衛官の使命感を低下させるだけでなく、隊員応募数の減少にもつながる。最近では少子化が進み、応募数自体が低下しつつあるが、やがては隊員の質の低下をもたらす、高度な武器の運用能力まで低下させるだろう。

日米同盟の信頼度の低下も問題だ。イージス情報漏洩事件では秘密を守る義務のない警察官、「しらね」の火事では消防署員、「あたご」では海上保安官から、日米防衛機密と指定されている機密区画に立ち入り検査を受けた。

この日本の対応は米軍に「自衛隊は軍隊ではないので同盟軍たりえず」との不信感を与えただけでなく、秘密保護法もない日本に機密度の高い武器は輸出できないと思わせただろう。実際、航空自衛隊の次期戦闘機にF-22ラプターをという話は完全にストップしている。



事故当日の日が暮れようとしている。海面には切断された清徳丸の船首が浮かぶ



海上保安庁が切断されたまま浮いている清徳丸の船尾を捜索する

### 事故からなにを学ぶべきか

この事故から学ぶことの第一は、明確な自衛隊の位置づけと、文民統制の明確化であり、欠陥の多い防衛機構の改革である。明確に「軍隊」と認定し、自衛隊に自らを律する独立した捜査・裁判権を与え、諸外国軍並に軍事刑法と軍事裁判所を作ることだ。

また、機構的には大臣の政務や防衛行政の直接の補佐機構として、制服も入れた内局の再構成も必要であろう。探知後12分で東京に飛来する核ミサイルに対処するには現場——統幕議長(統幕オペレーション)——防衛大臣——総理大臣と指揮系統を改めることである。

今回、7000トンを超える巨大な「あたご」より、操縦の容易な旋回径の小さな漁船が先に避けるべきではなかったか、「あたご」だけにすべての原因があったのか、など多様な意見や見解を掲載する新聞はなかった。この事故で学ぶべき第二は、普通に考えれば当然のことを言えるような社会をつくるべきであるということだ。私はこの事故の報道を見て、ある種の意見は完全に無視するという「言語封鎖空間」の存在が、本来の「言論の自由」を阻害していると感じた。

最後にOBとして後輩諸君に言いたいことは、規律厳正な海上自衛隊への献身と、不手際を

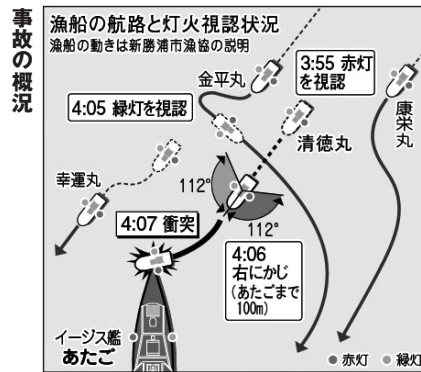
捜索に当たった第三管区海上保安本部の巡視船「やしま」PLH22。画面中央奥に「あたご」も見える



「あたご」の各部に乗員が出て海面を注視する。作業艇を吊るしていたアームは両舷とも展開されている



事故前に撮影された清徳丸。イージス艦に比べればあまりにも小さな船だ



### 事故の概況

漁船の航路と灯火視認状況
漁船の動きは新藤浦市漁協の説明
3:55 赤灯を視認
4:05 緑灯を視認
4:07 衝突
4:06 右にかじ(あたごまで100m)
イージス艦 あたご
● 赤灯 ● 緑灯

隠そうとする自己保存本能からの脱皮である。女々しく、すべてが後手後手の弁解に終始したのはOBとして悲しく、さびしい限りであった。

昔と違って、自衛官が正々堂々と正当な主張をすれば、国民も理解する時代になりつつある。メディアの批判にさらされようとも、表に出て正々堂々と自己の主張をしていただきたい。

最後に、主神ゼウスが戦いの女神アテネに与えた「無敵の盾」のイージスが、「無敵の盾」となるのか、「無益の盾」となるかの鍵は国民にあることを申し上げたいと思う。国民のレベルこそが海自のレベルを規定するのだということをもって結びとしたい。

